

清閑寺

前

ワキ 叡山の僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 小督局

地は 山城

季は 秋

ワキ詞

「是は比叡山より出でたる僧にて候。秋も末になり候へば。時雨に染むる紅葉の色。さまざまなるが面白さに。我立つ杣の山伝ひ。音羽の峰に出で、候。又是なる山陰にひそかなる寺の見えて候ふは。承り及びたる清閑寺にて有りげに候。立ち越え一見せばやと思ひ候。

サシ

「我此寺に来て見れば。さすがに都遠からで。かゝる霊地のありけると。知らでぞたゞに過しつる。

歌

「年月の。古き寺井は水澄みて。く。流れの末も濁りなき。御代のためしに引きなれし。御裳濯川もかくやらん。げに面白や斧の柄も。此山陰に朽ちぬべし。く。

詞

「あら不思議や間近う琴の音の聞え候。慕ひて聞かうずるに候。

シテ女

「今日は嵐の烈しくて。且つ散りそむるもみぢ葉をかき改めて陵の。あたりを清め奉り。玉の小琴を

かきならし。

地

「比翼連理の語らひも。変はれば変はる世の習ひ。とにかくに恨めしや。飽かぬ別れの中々に。会者定離と聞く時は。兼ねてしるき理り。春の花も散り果てゝ。猶も卯月の若楓。秋は紅葉に染めなし。て。錦おりかく神無月の。山風に誘はれ。庭に散り敷くもみぢ葉を。かき集め林間に。酒暖めて紅葉は。煙と立ちのぼる。生者必滅の理りや。生者

必滅の理り。

ワキ

「如何に是なる女性に尋ねべき事の候。

シテ

「こなたの事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「是なる塚に植ゑられたる紅葉は。取り分け色深く候。見申せば塚のあたりを懇ろに清め。琴を調べ給ふは。何と申したる御事にて候ふぞ。

シテ

「さん候是は高倉院の御廟にて候。紅葉にめでさせ給ふにより。紅葉の君と申し習はし候。されば御

しるしに楓を植ゑられて候。又是なる塚は小督の局のしるしなり。わらはも小督のゆかりなれば。折々琴をかきならし。御廟を清め奉り候。

ワキ「さては御名も世の中に。高倉院の御廟と聞くとともに不思議やあたりを見渡せば。並ぶ御廟もなき山に。いかで納まり給へるぞ。委しく語り給ふべし。

シテ「さらば語つて聞かせ申し候ふべし。さても高倉院御在位の御時。小督の局行方知らずなり給ひし

かば。たゞひたすらの御歎きに。御命も危く見えさせ給ひしに。東山清閑寺に小督ありと聞き召され。我むなしくなりにし後は。此寺に葬り申せとの。御遺言を違へず此所に納めしなり。されば小督の局毎日花水を捧げ。琴をならして手向をなし。其後に小督も空しくなり給へば。憚ながら御廟のほとりに。かくしるしを立てしなり。浅からざりし御契り。短き夢と覚めはてゝ。昔語ぞ恨め

しき。

下歌地

「げにや高きも賤しきも。なほ定めなき世のためし。

上歌

「むかしは玉楼金殿の。く。床を磨きて起臥の。

今は紅葉の散り敷くや。是ぞ錦の御蓐。山風はげしき折々は。音楽を奏す心地して。絶えず流るゝ谷水の。外に音する人ぞなき。かくて夕日も傾けば。く。暇申して琴の音を。又かきならしかきならし。たつや錦の村紅葉の。散りのまぎれに。

かき消すやうに失せにけり。く。(中人)

ワキ詞

「さては小督の幽霊かりに頭はれ。我にま見え給ひけるぞや。

歌

「猶も奇特を深山辺の。く。松も木深き月影に。早くもしるき琴の音の。嵐につれて聞ゆなり。く。

後ジテ

「琴の音に嶺の松風通ふらし。何れの緒より調べそめけん。

ワキ 「不思議やな夜も更方の月影に。 爪音けだかき琴の
音の。 さも面白く聞ゆるは。 小督の局にてましま
すか。

シテ 「さも恥かしき我姿。 春を忘れぬ花の袖。

ワキ 「恨みながらに打ち返し。 猶も昔を語り給へ。

シテ 「今宵は風もをさまりて。 名にし負ひたる寺の名も。

ワキ 「清く静けき谷水の。

シテ 「音羽の山も嶺つゞき。 月も隈なき霊地かな。

クリ地 「それ一栄一落の世の習ひ。 昔の春の花盛。 並ぶ梢も
なき身にて。 連理の契り浅からず。 三千の寵愛一
身にあり。

シテサシ 「かくたぐひなき御語らひ。 平相国に漏れ聞え。

地 「たばかり我を失はん。 所存と聞きて烏羽玉の。 夜
半にまぎれて忍び出で。 嵯峨野の奥に身を隠す。

シテ 「主上は思ひに打ち臥し給ひ。

地 「秋も最中の月にだに。 御格子なども上げられず。

深く涙に沈ませ給ふ。

クセ「さる程に仲国は。寮の御馬を賜はりて。名月に鞭をあげて。駒を早め行く程に。嵯峨野の里の何くにか。忍び給ふと賤の屋の。片折戸をしるべにて。駒をひかへて嵐ふく。松の響か琴の音か。それかあらぬか聞き分かぬ。時雨する夜も時雨せぬ。雲霧も立ち晴れて。空も隈なき秋の夜の。月にあくがれ出で給ふと。法輪に参れば。さてこそしるき

琴の音の。樂は何ぞと聞き馴れし。想夫恋なるぞ嬉しき。

シテ「かゝる山路の末までも。忍ばせ給ふ御情。有難しく。いつの世にかは忘草。摘むともかひあらじ。岸に生ふてふ住吉の。松とし聞けば帰らんと。いらへ申せし水荃を。受けて喜ぶ仲国は。雲の上にご帰りける。百敷や。(舞)

シテ「百敷や。古き軒端の忍ぶにも。

地 「あまりて漏るゝ昔語や。

シテ 「かくて夜もはや明方の。

地 「かくて夜もはや明方の雲も。山の端に横ぎる。さ

も面白き。月の夜の明ぼの。是までなりと又陵の。

前にたゝずみ。

シテ 「想夫恋の。

地 「楽の手を尽し。

シテ 「さるにてもく。

地 「昔恋しや。

シテ 「此君に。

地 「飽かで別れし恨の末は。めいくとして。絶ゆる

期もなかるべし。暇申してさらばとて。かへす袂

にうつるや陵の。しるしの紅葉を立ちめぐる。天

津乙女の姿もとゞまらぬ。雲の通路中絶え果てゝ。

其まゝ夢とぞなりにける。

